

# 年賀状の用語

—

門松は冥途の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし

俗伝によれば、この歌は一休（一三九四—一四八一）の詠といふことになつてをり、平賀源内（一七二八—一七七九）の談義本『根南志具佐』（一七六三）にも、

門松は冥途の旅の一里塚とも気はつかで、無上に新春の御慶と寿き（以下略）

として引かれてゐる。これは、世人みなめでたいめでたいと祝ひ合つてゐる新年を、正月毎に人は年齢を重ね、それだけ死に近づくのだから、考へやうによつては、素直にめでたしといつて喜んでなぞをられないと絡んだもので、正月と死といふ相反するイメージを結合させた点は、一種のブラックユーモアの興味を狙つた歌と解される。さて、それにしても、このやうな歌が詠まれる背景には、室町時代の人々が、現代のわれわれと同様に、お正月になると口々に「めでたし」「めでたし」を連発してゐたといふ、言語生活上の事実があつたことを想像させるのである。

今日、われわれは、正月には顔を合せると「明けましておめでたうございませう」といふ慣用表現を口にす。そして、年賀状にも、それに類した慣用的な表現を書き記すといふ言語習慣を持つてゐる。そこに用ゐられる慣用的な常套語句が、本稿でいふ、年賀状の用語である。

年賀状だからといつて、何も特別の形にはまつた文言を記す要はない、年賀郵便の制度を利用するだけであつて、平素の無沙汰を詫びるのもよからうし、

年賀状の用語（橘）

国文研究室

橘

豊

家族の近況を述べるのもよからう、つまり、文面は日常の郵便と変るところはない、といふ人があるかも知れない。しかし、年賀郵便、年賀状の文面には、或る一定の形があるといふのも事実であつて、それを利用する人も非常に多いのである。私は今、どうして多いのかとか、さうあるべきだとかいつた、理由や当為やを述べてゐるのでなく、事実を記述してゐるのである。事実といへば、慶祝電報の電文の例文にも、年賀の部があつて、「新年オメデトウゴザイマス」を始め、幾つかの型を掲げてゐる。また、巷間に、「手紙の書き方」の類の出版物は多く、更に年々新たなものが刊行されてゐるが、その中の一つ、例へば、斎藤芳樹著『手紙の書き方』<sup>(2)</sup>には、

一般に用いられている年賀用語には、賀正、賀春、頌春、献春、謹賀新年、恭賀新年、謹賀新禧、恭賀新禧、あけましておめでとうございます、新年おめでとうございます、謹んで新年のお祝詞を申し上げます、などがある。

として、年賀状の用語を列挙してゐる。

かうした、用語が使用されてゐることを確めるために、試みに、私が今年受取つた年賀状二〇五通について、その文面を調べてみた。その結果は、表一に示す通りである。順番は、書き出しの語句の五十音順による。

表一 年賀状の文面（五十音順）

番号	文面（五十音順）	使用回数	備考
1	あけましておめでとう	四	
2	あけましておめでとう	五	
3	おめでと	一	
4	賀春	一〇	
5	賀正	一五	
6	元正啓祚、和気笑迎春	一	
7	恭賀新禧	一	
8	恭賀新年	一	
9	御慶永日	一	
10	謹賀新年	三九	
11	蔵前の蛇口から何が出る…	一	地の文のみで、年賀状特有の用語は使用してゐない
12	迎春	七	
13	迎年	一	
14	心から初春のお慶びを申しあげます	一	
15	寿	一	
16	昨年はお会い出来ず残念でした…	一	地の文のみ
17	春春	一	
18	春寿	一	
19	頌春	一	
20	頌春	二	
21	頌春祈福	一	
22	新春の御祝詞を申し上げます	一	
23	新春の御よろこびを申し上げます	二	
24	新春を寿ぎ謹んでお慶び申し上げます	二	

番号	文面	使用回数	備考
25	新年おめでとう	二	
26	新年おめでと	四	
27	新年のおよろこびを申し上げます	一	
28	一九七六年のクリスマスと昭和五二年の御祝詞を申し上げます	一	
29	謹んで新春のお慶びを申し上げます	七	「謹みて新春のお慶びを申し上げます」二例を含む
30	謹而奉賀新春祝日	一	
31	謹んで新春の御祝詞を申し上げます	一	
32	謹んで新春をお祝い申し上げます	一	
33	謹んで新年の御よろこびを申し上げます	五	
34	謹んで新年の御祝詞を申し上げます	三	
35	としのはじめにあたり、ひととせのおしあわせをおいのりいたします	一	
36	はつはるのおよろこびを、めでたくもうしおさめます	一	
37	初春のおよろこびを申し上げます	二	
38	日出乾坤耀	一	
39	A Happy New Year	一	
40	Bonne année	一	
41	Selamat Tahun Baru/	一	
計		二〇五	インドネシア語で「新年おめでとう」に相当する

これを回数が多いものから順に並べ替えて整理すると、表一のやうになる。

表二 年賀状の文面（出現度数順）

順位	番号	回数	出現率 (%)	累積回数	累積出現率 (%)
一	2	五五	二六・八三	五五	二六・八三
二	10	三九	一九・〇二	九四	四一・八五
三	5	一五	七・三二	一〇九	五三・一七
四	26	一四	六・八三	一二三	六〇・〇〇
五	20	一二	五・八五	一三五	六五・八五
六	4	〇	四・八八	一四五	七〇・七三
七	12	七	三・四一	一五二	七四・一五
七	29	七	三・四一	一五九	七七・五六
九	33	五	二・四四	一六四	八〇・〇〇
〇	1	四	一・九五	一六八	八一・九五
一	34	三	一・四六	一七一	八三・四一
二	23	二	〇・九八	一七三	八四・三九
二	24	二	〇・九八	一七五	八五・三七
二	25	二	〇・九八	一七七	八六・三四
二	37	二	〇・九八	一七九	八七・三二
六	3	一	〇・四九	一八〇	八七・八一
六	6	一	〇・四九	一八一	八八・二九
六	7	一	〇・四九	一八二	八八・七八
六	8	一	〇・四九	一八三	八九・二七
六	9	一	〇・四九	一八四	八九・七六
六	11	一	〇・四九	一八五	九〇・二四
六	13	一	〇・四九	一八六	九〇・七三
六	14	一	〇・四九	一八七	九一・二二
六	15	一	〇・四九	一八八	九一・七一
六	16	一	〇・四九	一八九	九二・二〇
六	17	一	〇・四九	一九〇	九二・六八

年賀状の用語（橘）

順位	番号	回数	出現率 (%)	累積回数	累積出現率 (%)
一	18	—	〇・四九	一九一	九三・一七
一	19	—	〇・四九	一九二	九三・六六
一	21	—	〇・四九	一九三	九四・一五
一	22	—	〇・四九	一九四	九四・六三
一	27	—	〇・四九	一九五	九五・一一
一	28	—	〇・四九	一九六	九五・六一
一	30	—	〇・四九	一九七	九六・一〇
一	31	—	〇・四九	一九八	九六・五九
一	32	—	〇・四九	一九九	九七・〇七
一	35	—	〇・四九	二〇〇	九七・五六
一	36	—	〇・四九	二〇一	九八・〇五
一	38	—	〇・四九	二〇二	九八・五四
一	39	—	〇・四九	二〇三	九九・〇二
一	40	—	〇・四九	二〇四	九九・五一
一	41	—	〇・四九	二〇五	一〇〇・〇〇

これによると、（一）「あけましておめでとうございます」と記す人が最も多い。（二）第一位から第三位までの上位三者（「あけましておめでとうございます」「謹賀新年」「賀正」）で、累積出現率が五三・一七%に達し、五〇%を超過、つまり全体の半数以上を占めることになる。このことは、年賀状の半数は、この三種の表現のうちの孰れかを用いてあるといふことであり、年賀状の用語が、かなり偏つた用ゐられ方をしていることが解る。（三）欧文のものも含めて全体として、地の文だけといふ文面（11及び16の二通がそれに当る）は極く少数で、年賀状の書出しの語句としては、何らかの形式的な慣用表現を求める傾向が顕著にみられる。

二

以上の結果は、私の許に届いた年賀状だけについての数値であるので、年賀

状の用語について発言するための資料として、一方的に偏向してはほしくないかといふ危惧が抱かれるので、その惧れをなくするために、今少し別の角度からする調査が必要であると考へた。そこで、前の、私宛の年賀状に用ゐられた語句の中で、二回以上使用されてゐる一五種の表現について、どの表現を多く用ゐるかを、他の人について調査することにした。

(一) 調査方法

アンケート方式で記入して貰ふ方法をとつたため、次のやうな調査用紙を準備した。

年賀状を書く(または捺印・印刷する)とき、次のどの表現を用いますか。  
○印をつけてお答え下さい。

番号		○印
1	あけましておめでとう	
2	あけましておめでとうございます	
3	賀春	
4	賀正	
5	謹賀新年	
6	迎春	
7	頌春	
8	新春の御よろこびを申し上げます	
9	新春を寿ぎ謹んでお慶び申し上げます	
10	新年おめでとう	
11	新年おめでとうございます	
12	謹んで新春のお慶びを申し上げます	
13	謹んで新年の御よろこびを申し上げます	
14	謹んで新年の御祝詞を申し上げます	
15	初春のおよろこびを申し上げます	
16	定まっています	
17	(その他、右以外の表現を用いる場合は、お書き下さい)	

調査用紙は二七二枚配布中、二四九枚が回収され(回収率九一・九四%)、その中、記入洩れ等で九枚を除き、二四〇枚を有効回答とすることができた。

(二) 調査対象

調査に当つては、茨城大学教育学部附属中学校の生徒の父兄を対象とすることにした。被調査者二四〇名の性別構成は、男二〇五名(八五・四二%)、女三五名(一四・五八%)、また、平均年齢は四三・八五歳で、毎年平均一七八・五八通の年賀状を発送し、一九〇・〇八通の年賀状を受け取つてゐる。

表三 調査結果の集計(五十音順)

番号	回数	順位	表二の順位	番号	回数	順位	表二の順位
9	一〇	一三	一一	計	四七八		
8	一七	〇	二	17	(一七)	(一七)	
7	二三	(七)	五	16	(二三)	(二五)	
6	〇	六	七	15	一五	一	
5	(一一)	一	二	14	四四	四	
4	二五	五	三	13	二一	九	
3	(一四)	(二)	六	12	六一	二	
2	六一	二	一	11	二二	八	
1	五	(二六)	〇	10	三	(二七)	二

(三) 集計

調査結果をまとめると、表三のやうになる。用語使用総計が四七八と、回答者数を上廻つてゐるのは、一人で二箇所以上に○印をつけた人があつたためである。また、第17項は、この欄に何らかの記載を行つた回答が七通あつたといふことで、その内訳は、(1)「謹賀新年」に添書をする(四名)、(2)表現は年に

よつて変わることがあり、毎年同じとは限らない(二名)、(3)「賀春」と記したものの(一名)で、(1)は、第5項に加へるべきもの、(2)は第16項に、(3)は第3項に加へるべきものである。そこで、それらを各項に繰入れたものが、( )内の数字である。右の結果を、使用回数が多いものから順に配列し、使用率等の数値を算出して表記すると、表四の通りとなる。(表三の( )内の、修正後の数字による)

表四 調査結果の集計(使用度数順)

順位	番号	表二の順位	回数	使用率(%)	累積回数	累積使用率(%)
一	5	二	一一一	二五・三一	一一一	二五・三一
二	2	一	六一	一一・七六	一八二	三八・〇八
二	12	七	六一	一一・七六	二四三	五〇・八四
四	14	一	四四	九・二一	二八七	六〇・〇四
五	4	三	二五	五・二三	三一二	六五・二七
五	16	五	二五	五・二三	三三七	七〇・五〇
七	7	五	二三	四・八一	三六〇	七五・三一
八	11	四	二二	四・六〇	三八二	七九・九二
九	13	九	二一	四・三九	四〇三	八四・三一
〇	8	一二	一七	三・五六	四二〇	八七・八七
一	3	六	一五	三・一四	四三五	九一・〇〇

順位	番号	表二の順位	回数	使用率(%)	累積回数	累積使用率(%)
一	15	一二	一五	三一・一四	四五〇	九四・一四
一	6	七	一〇	二・〇九	四六〇	九六・二三
一	9	一二	一〇	二・〇九	四七〇	九八・三三
一	1	一〇	五	一・〇五	四七五	九九・三七
一	10	一二	三	〇・六三	四七八	一〇〇・〇〇
一	17	一二	一	一	四七八	一〇〇・〇〇
計					四七八	一〇〇・〇〇

(四) 調査結果の考察

(1)定まつてゐないと回答したのは(第16項)二五名、僅か五・二三%であり、他の九四・七七%までは、何らかの慣用的表現を用ゐると回答してゐる。

(2)上位三項(「謹賀新年」「あけましておめでとうございます」「謹んで新春のお慶びを申し上げます」)で、累積回数二四三、累積使用率五〇・八四%となつて、全体の半数を超過し、ここでも少数の用語に集中する傾向が認められる。

(3)最も多く用ゐられるのは、「謹賀新年」で、第二位が「あけましておめでとうございます」となり、先の調査とは順序が入れ替つてゐる。

(4)第三位以下についても、必ずしも一致するとはいへないので、両者の間に果して相関があると言ひ得るか否かを知るために、相関係数を求めてみた。但し五位の第16項及び一七位の第17項とは、それに相当する項目が前の調査には置かれてゐなかつたので、省いてある。

表五 表二と表四の順位の相関

$(A_i - M_a)(B_i - M_b)$	$(B_i - M_b)^2$	$B_i - M_b$	$(A_i - M_a)^2$	$A_i - M_a$	表二の順位 ( $B_i$ )	表四の順位 ( $A_i$ )	表一の番号	表三の番号
16.1291	6.1009	2.47	42.6409	6.53	10	15	1	1
42.2491	42.6409	-6.53	41.8609	-6.47	1	2	2	2
- 3.8709	2.3409	-1.53	6.4009	2.53	6	11	4	3
15.7191	20.5209	-4.53	120.409	-3.47	3	5	5	4
41.3091	30.5809	-5.53	55.8009	-7.47	2	1	10	5
- 2.4009	0.2809	-0.53	20.5209	4.53	7	13	12	6
3.7191	6.4009	-2.53	2.1609	-1.47	5	7	20	7
6.8391	19.9809	4.47	2.3409	1.53	12	10	23	8
20.2491	19.9809	4.47	20.5209	4.53	12	13	24	9
33.6591	19.9809	4.47	56.7009	7.53	12	16	25	10
1.6591	12.4609	-3.53	0.2209	-0.47	4	8	26	11
3.4291	0.2809	-0.53	41.8609	-6.47	7	2	29	12
0.6321	2.1609	1.47	0.1849	0.43	9	9	33	13
-15.5109	12.0409	3.47	19.9809	-4.47	11	4	34	14
11.3091	19.9809	4.47	6.4009	2.53	12	11	37	15
175.1195	215.7335		272.9366		113	127	計( $\sum_{i=1}^{15}$ )	
11.6746 (P)	14.3822 ( $\sigma b^2$ )		18.1958 ( $\sigma a^2$ )		7.53 (Mb)	8.47 (Ma)	平均( $\frac{1}{15} \sum_{i=1}^{15}$ )	

$$\text{相関係数}(R) = \frac{P}{\sigma a \sigma b} \dots\dots\dots (1)$$

$$P = \frac{1}{15} \sum_{i=1}^{15} (A_i - M_a)(B_i - M_b) = 11.6746 \dots\dots\dots (2)$$

$$\sigma a = \sqrt{\frac{1}{15} \sum_{i=1}^{15} n_i (A_i - M_a)^2} = \sqrt{18.1958} = 4.266 \dots\dots\dots (3)$$

$$\sigma b = \sqrt{\frac{1}{15} \sum_{i=1}^{15} n_i (B_i - M_b)^2} = \sqrt{14.3822} = 3.792 \dots\dots\dots (4)$$

∴(2)(3)(4)を(1)に代入すると

$$R = \frac{11.6746}{4.266 \times 3.792} = \frac{11.6746}{16.1767} = 0.7217$$

従つて求める相関係数は〇・七二一七といふことになる。一般に  $R > 0.5$  は、両者間に何らかの相関があることを意味し、 $R > 0$  は増減相伴ふ相関関係にあることを示すから、前の二つの調査は、関聯のあることが証明されたわけである。

さて、二つの調査において、用語の使用順位に相関が認められることが分つたので、次に両者を重ね合せたものについて、用語の使用順位並びにその出現率を算出したのが表六である。尚、表四の16項に相当するものは、先の調査では、表一の備考欄を考慮して、地の文のみであつた二通を充当することとした。順位は、二回であるので一二位とした。

表六 表二と表四の総計

計	一七	一六	一五	一三	一三	一一	一一	一〇	九	八	七	五	五	四	二	二	一	順表四の 位の
	17	10	1	9	6	15	3	8	13	11	7	16	4	14	12	2	5	番号上
四七八	1	三	五	〇	〇	一五	一五	一七	二一	二二	二三	二五	二五	四四	六一	六一	一一	同上回数 (A)
		二	〇	二	七	二	六	二	九	四	五	二	三	一一	七	一	二	順表二の 位の
一八一		二	四	二	七	二	〇	二	五	四	二	二	一五	三	七	五	三九	同上回数 (B)
六五九		五	九	二	七	一七	二五	一九	二六	三六	三五	二七	四〇	四七	六八	一一六	一六〇	回数合計 (A+B)
		一六	一五	一四	一二	一二	一〇	一一	九	六	七	八	五	四	三	二	一	順合計の 位の
一〇〇・〇〇		〇・七六	一・三七	一・八二	二・五八	二・五八	三・七九	二・八八	三・九五	五・四六	五・三一	四・一〇	六・〇七	七・一三	一〇・三二	一七・六〇	二四・二八	合計の出現 率(%)

これによると、上位五位までの順序は表四の場合と変わらず、表四について考察した事項の中、(2)(3)は、表六についても同様に当てはまること分る。

年賀状の用語(橘)

以上、二つの調査を通じて、今日、年賀状を書く場合、何らかの慣用的表現を用いる傾向が強いことが明らかになったが、次に、これらの用語はいつごろから用いられるやうになつたかについて考へてみたい。そのための資料として

- (一) 国語辞書
  - (二) 書状
  - (三) 書簡作法書
- の三種が挙げられる。

(一) 国語辞書について、(1)「賀正」(「がしやう」とよむ場合と「がせい」とよむ場合とがある)、(2)「賀春」、(3)「恭賀新年」、(4)「謹賀新年」、(5)「迎春」の各語について、見出し語として収載してゐるか否かを調査した。その結果は表七の通りで、○印を附した欄は、見出し語として記述のあることを示す。

表七 国語辞書に記載のある用語

8	7	6	5	4	3	2	1	
和英語林集(再版)	和英語林集(初版)	パジエス日仏辞典	和英語林集(初版)	日葡辞書	易林本節用集	運歩色葉集	下学集	書名
一八八六	一八七二	一八六八	一八六七	一六〇三	一五七九	一五四八	一四四四	刊行年
								賀正
								賀正
								賀春
恭賀								恭賀新年
○								謹賀新年
								迎春

書名	刊行年	賀正 <small>がし</small>	賀正 <small>いせ</small>	賀春	恭賀 新年	謹賀 新年	迎春
言海	一八九一	○	○	○	○	○	○
日本大辞書	一八九二	○	○	○	○	○	○
日本大辞林	一八九四	○	○	○	○	○	○
ことはのいつみ	一八九八	○	○	○	○	○	○
ことはのいつみ補遺	一九〇八	○	○	○	○	○	○
山田美妙大辞典	一九一〇	○	○	○	○	○	○
大日本国語辞典	一九一五	○	○	○	○	○	○
改修 言泉	一九二二	○	○	○	○	○	○
大言海	一九三二	○	○	○	○	○	○
広辞苑 (初版)	一九五五	○	○	○	○	○	○
広辞苑 (第二版)	一九六九	○	○	○	○	○	○
日本国語大辞典	一九七六	○	○	○	○	○	○

この表七を一瞥して、稍奇異な感に打たれるのは、既に表六等によつても明らかな如く、今日において年賀状の慣用表現として最も popularity が高いと認められる「謹賀新年」が、僅かに『和英語林集成』第三版に見られるだけで、それを除いては、第二次大戦後の『広辞苑』『日本国語大辞典』が現れるまで、記載がないといふことである。このことは、「謹賀新年」といふ用語が、年賀状の用語として定着したのが、他の「拜啓」や「敬具」が書簡の用語として固定したのが明治に入つてからのことであるのと同じく、近代に入つてからであることを示してゐるやうに思はれる。特に、『和英語林集成』において初版・第二版に記載がないのに、第三版に至つて登場してくるのは、右の観点を示し得て象徴的である。(ポン(J.C.Hepburn 1815-1911)の『和英語林集成』第三版には、次のやうな記述がみられる。

Kinga キンガ 謹賀 n. Salutation, compliments  
 ——— shin nen.  
 Kyoga キョウガ 恭賀 n. (Uyanyashiku iwan)  
 Respectful, congratulation.  
 その他、ハジス (Leon Pages 1814-86) の『日仏辞典』には表七の該当項目の記載はないが、関聯語として、次のやうな記述がみられる。  
 「新年」「改年」「履端」の各語に (S)

Chinen シンネン (Atarachi tochi アタラシイトシ)  
 Année nouvelle. Chinenno ghiokai, シンナンノ  
 キョケイ。 Allégresse nouvelle (en parlant  
 à une personne honorable) .  
 Cainen カイネン c-à-d. Chinen, シンナン ou  
 Aratamano Tochi アラタマノトシ。 Année nouvelle .  
 Ritan リタン c-à-d. Chôgouat シャウグワン。  
 première lune, ou première mois de l'année .

この中で、特に「新年の御慶」といふ表現を挙げてゐることは、『日葡辞書』(一六〇三)にも見られるもので、この種の表現が室町時代から慣用的に用ゐられてゐたことを表すものとして、注意される。

(二) 書状については、今日の年賀状の用語が、いつ頃から、どの位の頻度で用ゐられるやうになつたかを調査すると共に、今日とは異なつた慣用表現があれば、それにも注意を払ふやうにとめた。資料としては、活字や写真版として刊行されてゐるものに拠つたが、前の辞書の調査で、現代の年賀状の用語は、近代以前には用ゐられてゐないといふ予測が立てられるので、近世末期と近代初期のものに限つてある。国語辞書について調べたのと同様の事項について調査した結果は、表八に示す通りである。



表 八 書状における年賀用語の使用回数

	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
計	芥川竜之介 (一八九二—一九二七)	夏目漱石 (一八六七—一九二六)	二葉亭四迷 (一八六四—一九〇九)	国木田独步 (一八七一—一九〇八)	田口卯吉 (一八五五—一九〇五)	正岡子規 (一八六七—一九〇二)	勝海舟 (一八三三—一九一九)	樋口一葉 (一八七二—一九一六)	福沢諭吉 (一八三四—一九〇二)	森有礼 (一八四七—一九一八)	木戸孝允 (一八三三—一七七七)	坂本竜馬 (一八三五—一六七七)	佐久間象山 (一八一二—一六四四)	書状執筆者
	『筑摩書房 昭和三三年刊 『芥川竜之介全集』』	『岩波書店 昭和四一年刊 『漱石全集』』	『岩波書店 昭和四〇年刊 『二葉亭四迷全集』』	『新潮社 明治四三年刊 『独歩書簡』』	『全集刊行会 昭和四四年刊 『田口卯吉全集』』	『アルス 大正一五年刊 『子規全集』』	『改造社 昭和四四年刊 『海舟全集』』	『筑摩書房、昭和二八年刊 『一葉全集』』	『岩波書店 昭和三六・七年 刊 『福沢諭吉全集』』	『大久保利謙編 『森有礼全集』』	『妻木忠太編 日本史籍協会 刊 『木戸孝允文書』』	『岩崎英重編 日本史籍協会 刊 『坂本竜馬関係文書』』	『信濃毎日新聞社刊 『象山全集』』	依拠本
	『明治三九年(一九〇六) 『昭和二年(一九二七)』	『明治三二年(一八八九) 『大正五年(一九一六)』	『明治一三年(一八八〇) 『明治四二年(一九〇九)』	『明治三三年(一八九〇) 『明治四一年(一九〇八)』	『明治四年(一八七二) 『明治三七年(一九〇四)』	『明治一三年(一八八〇) 『明治三五年(一九〇二)』	『安政元年(一八五四)頃 『明治三二年(一八九九)』	『明治二一年(一八八八) 『明治二九年(一八九六)』	『安政六年(一八五九) 『明治三三年(一九〇〇)』	『慶応元年(一八六五) 『明治二一年(一八八八)』	『嘉永五年(一八五二) 『明治一〇年(一八七七)』	『嘉永六年(一八五三) 『慶応三年(一八六七)』	『天保四年(一八三三) 『元治元年(一八六四)』	書状執筆年代
	二、一四五	三、四六二	三四六	四六	四八	七六八	一〇六	八七	一、九五〇	二二二	二、二〇九	一八三	一、二九〇	書状総数
	八	一	一	一	一	六	一	一	一	一	一	一	一	賀正
	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	賀春
	七	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	恭賀新年
	九	四	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	謹賀新年
	三	一	一	一	一	一	一	一	一	三	一	一	一	迎春
	他に「あつし及び新年を賀し てまつる」とあり		他に「恭賀新禧」三例 「謹賀新正」二例あり			「恭賀新禧」一例 (一九〇一)あり			「恭賀」二例 (明治一八年 頃、明治三三年)あり	他に「恭賀」一例 (明治一四年)あり	「新禧萬福」四例あり 「新禧芽出度」四例あり	「改年賀事」一例 (慶応三年)あり	「恭賀」は一例り (嘉永五年)あり	備考

このやうに、右の五語句に限つてであるが、一二、〇〇〇以上の書状を調査して、その用例が僅かしか見出されないのは、書状総数は多くても、これらの用語の登場する可能性のあるのは一年の中の元旦の手紙に限られるといふ事情もあるが、やはり、明治初頭には、これらの用語が余り一般的でなかつたことを反映してゐるものと思はれる。

尚、右の中、(1)「謹賀新年」については、二葉亭四迷の書状中に現れる例は、明治三十七年一月三日のもの一通、同年一月九日のもの(はがき)一通、明治三十八年一月三日のもの一通であつて、『和英語林集成 第三版』の例文を除くと、それに次いで古く、しかも実際の言語生活の場で使用された例といふことになる。漱石のものは、明治四十二年一月三日のもの一通、明治四十三年一月三日のもの一通(この文面が『日本国語大辞典』に用例として掲載されてゐる)、同一年四月四日付のもの一通及び明治四十四年一月のもの一通である。芥川の二例は何れも大正に入つてからのものである。

(2)「恭賀新年」については、国木田独歩の例は、明治四一年元旦のもの一通であり、二葉亭の例はそれより遅れて明治四十二年一月のもの三通である。漱石の場合は、明治四十二年一月二日付一通、明治四十三年一月一日付一通及び同年一月三日付一通となつてゐる。『日本国語大辞典』には、夏目漱石の『吾輩は猫である』(1)の「恭賀新年とかいて」といふ一節が初出例として掲げられてをり、『吾輩は猫である』の成立を明治三十八年(一九〇五)とみても、前の例は何れもこれに及ばない。

(3)ただ「恭賀」単独の語形については、右辞典には、『和英語林集成 第三版』つまり明治一九年(一八八六)の文面を初出例として掲げてゐるが、これについては表八の備考欄にも記し置いた通り、嘉永五年(一八五二)正月十九日付、佐久間象山の書状に

……：弥御清安奉恭賀候

とあるのが、今回の調査では最も古い初出例であることが分るし、その他、森有礼の、明治一四年一月二六日付書信の

……：皆様御安康之由恭賀大悦申上候

また、福沢諭吉の、明治一八年頃のものとしてされる一月二六日付書状にある、

……：益御清安恭賀、陳ば此度……

も、『和英語林集成 第三版』に先立つ例として数へられるべきものである。(4)さて、このやうに、年賀状に今日と同じやうな「謹賀新年」や「賀正」を盛んに用ゐるやうになつたのは、明治末年頃からであることが明らかになつたが、それ以前の、新年に取交された書状には、慣用的表現がなかつたかといふと、さうではない。新年といつても特に改つた表現を施してゐない書状、或いは用務だけを記したのもあつたりして、正月早々に書く書簡は全て年賀の挨拶を目的とした書状ではないが、今、年頭の挨拶を記した書状のみを拾ひ出すと、芥川の場合は、「謹賀新年」と記したもの二通、「賀正」と記したもの一通及び備考に挙げた二例を含めた五通が全てである。欧文のものといふのは独文で、『Viel Glück im neuen Jahre, 1913』と記されてゐる。これが、漱石となると、表八に掲げた八通の他に、

新年の御慶目出度申納候

と認めたものが、明治二八年一月一〇日付一通、明治二九年一月一日付一通、明治三十四年一月一日付一通、明治四十四年一月のもの一通計四通あり、その他は「拜啓賀状拜見致候……」(明治三十九年一月四日付)といふ、賀状に対する返礼を記したもの、「拜啓一陽来復御目出度存候……」(大正二年一月七日付)一通等がある。特に、「新年の御慶……」といふ表現は、正岡子規や福沢諭吉らの書状にも多数見られるもので、また、日葡辞書(日仏辞典)にも掲げられてをり、中世以来、江戸時代を通じて近代に至るまで、広汎に行はれてゐた、年賀状の慣用表現の代表的な類型であつたことが知られるのである。その他、表八には掲げなかつたものとして、「新禧」語も屢々見られるもので、

「新禧万福」「新禧芽出度」或いは「恭賀新禧」「謹賀新禧」と熟した形で表現も汎く用ゐられてゐたことが分る。

(5)次に、「新年おめでたう」といふ表現がいつ頃から用ゐられるやうになつたかは、今回の調査結果から判断する限りでは、佐久間象山が嘉永元年（一八四八）正月十日に、

新年芽出度候……

と記してゐるのが古く、その後は、福沢諭吉の書状の中で、

- (a)新年御慶目出度申納候 (明治一一年一月三日他)
- (b)新年目出度申納候 (明治一三年一月一七日他)
- (c)新年目出度奉存候 (明治一三年一月一九日他)

等の諸例がみられ、また二葉亭四迷の書状には、

- (d)新年御目出度存候 (明治三六年一月八日)

といふ文例がみられるので、恐らくは、(a)↓(b)↓(c)↓(d)のやうな経過を辿つて、「新年おめでたう」といふ表現に達したものではなからうかと考へられる。

(三)第三に、書簡作法書を資料として、年賀状の用語の用ゐられ方を調べてみることにする。書簡作法書の中、新年の慣用的表現についての記載のある、次の一二種について調べた結果は、表九に示す通りである。(1)庭訓往来、(2)ロドリゲス 日本大文典、(3)御家仮名往来、(4)書札弁惑集、(5)消息文梯、(6)消息案文、(7)雅言用文章、(8)増補珍玉用文章、(9)新体書翰便蒙、(10)作文解環、(11)今様かな消息、(12)書翰文講話及文範。

表九 書簡作法書に記載のある用語

1	2	3	4	5
庭訓往来(応永年間、一四二〇年頃成立)	ロドリゲス 日本大文典 (一六〇四)	御家仮名往来	書札弁惑集	消息文梯
続群書類従巻第三六一	土井忠生訳 三省堂昭和三〇年刊	延宝六年 (一六七八) 刊、東京大学附属図書館蔵	宝暦一〇年 (一七六〇) 序、東京大学国語研究室時枝文庫蔵	文化一二年 (一八一五) 刊、東京大学附属図書館蔵
春始御悦、向貴方先祝申候畢。富貴萬福、猶以幸甚々々。	Xinxunno goxūngui (新春の御祝儀) ataraxij faruno von yorocobi (新し春のおん喜ぶ) Cainenno guioquei (改年の御慶) Aratamano toxi (あらたまの年。新年) Aratamano toxi (あらたまの年。新年)	初春の御ことぶき、いく千代よろづ代までも 尽き候まじくと祝入まゐらせ候	改年之御慶不可有尽期御座候上 御慶不可有尽期候等 御慶申納候下 改春 改曆 青陽 肇年 吉慶 吉兆 嘉慶 嘉兆 嘉事 際限 休期此外多シ	四時の詞よせ 春 正月 むつき むつまじ月とも としたち たるあしたの空のけしき 年のあらたまりては何事もうきたつ
正月進状	六七〇頁	上二〇頁	下二〇頁	三三ウ三四オ

書名	消息案文 黒沢翁満著	依拠本	天保四年 (一八三三) 刊、国会図書 館蔵	6	
年賀状の用語	こゝちに 神代のまゝのおきてか はらぬ春とは 明ゆく日かげのう らゝに 人の心ものどかにぞ(以 下略)	年賀の文	新年之御吉 新しき年の初のご 慶不可有尽 と。尽しなうほぎ聞 期目出度申 え侍り。先御渡りあ 納候先以貴 へかに。御ひとぞう 家御一統様 事もなくて。加はら 被成御揃弥 せ賜へる年のおむ祝。 御安全被成 何事かはとをむ。よ 御越歳珍重 ろこび思うたまふる。 之御儀奉存 次 候(以下略)	7	雅言用文章 黒沢翁満著
所在	六才	嘉永五年 (一八五二) 刊、東京大学 附属図書館蔵	○年始之文 新曆之御慶 賀不可有尽 期御座候先 以益御安泰 被為成御超 歳奉恐悦候 右年頭之御 祝詞奉申上 度捧愚札候 猶期永陽之 時候恐惶謹 言(以下略)	上二才	
			○年始之文 物皆はとうけたまは る中にも。曆のあた らしう成ぬるばかり。 めでたうよろこばし きをりからなん侍ら ざらましを。いつは あめれどいやましに。 栄えさせたまふ御あ たりに。くはうらせ たまへる年の御		

書名	増補珍玉用文 章	依拠本	慶応四年 (一八六八) 刊、東京大学 附属図書館蔵	8	
年賀状の用語	年始上輩江遺須状 新曆之御慶賀不可有尽際御座目 出度申納候。先以御家门様被遊 御揃益御安泰 (中略) 同輩江遺須寸状 改年之御吉慶不可有休期御座重 疊申納候。先以御地御全家様 御揃弥御勇健可被成御越年目出 度奉存候 (中略) 同下輩江遺須文 新年之御祝辞目出度申収候。先 以其御許様無御別条可被成御加 年重疊御儀奉存候 (以下略)	贈年始書 履端共ニ嘉祥慶凶愈御佳勝奉祝 弊居無事乍憚御為念被下間敷候 (中略) 其答 復新之御慶辞忝拜見假爾礼容御 同喜二候	新体書翰便蒙 明治四年 (一八七一) 刊、東京大学 附属図書館蔵	9	
所在	一才 一ウ 二才 四才	明治一〇年 (一八七七) 刊、架蔵	和漢雅俗三 体 作文解環 久保田梁山編 輯	10	
		明治一三年 (一八八〇) 刊、東京大学 附属図書館蔵	今様かな消息	11	
			初はるの文 はつ春の御寿何地も同じ御事と 歳千代かけて目出度申納めまゐ らせ候		

書名	依拠本	年賀状の用語	所在
12 書翰文講話及 文範 下巻 芳賀矢一・杉 谷代水編	大正二年 (一九一三) 富山房刊	一般紳士の年始状 新年の御慶めでたく申納候 (中略) 簡單なる新年状 賀正。 〔註〕正はハジメの義、又曆の事。 曆のはじめ、新らしき曆は 新年なり。「新正を賀する」 の意。	一頁 五頁
		謹賀新年。 恭賀新禧 〔註〕新禧の禧は福 又は吉 義。賀新禧とは「新しき幸 福なる年を賀する」の意。 新年の御慶めでたく申納候。新陽 の御慶めでたく申納候。 (以下略)	六頁

表九に掲げた書簡作法書とその記述について説明を加へると、次の通りである。

(1) 最初に『庭訓往来』を掲げたのは、一つには往来物も広義の書簡作法書と考へられることと、第二は、『庭訓往来』の冒頭すなはち正月進状が、前掲のやうな一節で書き起されてをり、芭蕉(一六四四—一九四)の句に「庭訓の往来誰が文庫より今朝の春」とよまれたやうに、後世、年賀状を書くときの手本に供されたと考へられるからである。ただ、この文中には、後世慣用的表現として使用されるやうになつた常套語句は、見出されない。

(2) ロドリゲスの『日本大文典』は、室町期の日本語を記述するに当つて、當時の口頭語ばかりでなく、書状を始めとする諸文書をも含めた文章語について

も、多数の詳細で正確な情報を伝へてくれてゐる。それら文章表現に関する記述の中から賀状の用語と見られるものを摘出して見たが、その中でも、「改年の御慶」或いは「新玉の年の御慶」等と、「……の御慶」といふ語句を掲げてゐるのは、これが後世の慣用的表現として最も一般的に用ゐられるやうになる語句であることを考へ合せるとき、その出現年代の早いことと共に、注目に値するといはなければならぬ。

(3) 『御家仮名往来』は、(5)(11)と共に、仮名消息系の書簡作法書として掲げたものである。

(4) 『書札弁惑集』は、短文の下に附された「上」「等」「下」といふ記号が示す通り、上輩宛、等輩宛、末輩宛と、差出す相手との身分の高下差によつて、表現上差違を設けるべきことを述べたものである。更に、これらの慣用表現を提示した後、年始の書状において専ら用ゐる語彙を集成して列挙してゐるのが注意される。

(6) (7)は孰れも黒沢翁満(一七九五—一八五九)の著で、彼の著書の特色は、漢文書き下し調の所謂候文の書状と、「侍り」語を主とした雅文の書状とを對比して掲げてゐるところにある。当時の国学者達は、漢文臭の残つてゐる候文でなく、わが国固有の純正の大和言葉、つまり平安朝女流文学に使用されてゐるやうな雅文で消息を認め、交換するといふ優雅な趣味を持つてゐたので、俗文である候文に対応する雅文の表現を記した模範文を必要としたのであつた。その需めに応じて著されたのが、これら黒沢翁満の著であつた。例文として掲げた中の上段に記された候文の「新曆之御慶」や「不可有尽期」、「目出度申納候」は、それぞれ当代の一般的表現の代表と考へられる。

(8)は(4)と類似の構成を持つてゐる。ただ、表中の文例では省略したが、「同輩へ遣す状」には、これに対する返答の書状が併載されてをり、その他、「得意先に遣す文」、「披露状」等も挙げてゐる。

(9)は尺牘風の文案を示したもので、ここに掲げられたやうな文面の執筆は、當時においても限られた少数者のものであつたと思はれる。しかし、部分的には、例へば「履端」は、賀状の一般的慣用語彙を収録したものといへよう。

(10)「賀新年文」は「慶賀篇」の中、すなはち「賀婚姻文」或いは「賀仕官文」等と並べて扱はれてゐる。候文の例文が、表中に掲げたものを含めて二通あり、

その後尺牘風のものを通掲げ、更に、年賀状用の短句や語彙を列挙し、それが一通り終つたところで、次に返信用の例文を二通掲げ、その後やはり尺牘風のものを通掲げ、その後再び賀状用の専用語句を出すといふ構成になつてゐる。従つて、年賀状だけについてみても、賀状の文例集と語彙集とを兼ね備へてゐることになる。

(1)は、明治期における、かな消息風の賀状を示したものの。

(2)この段階に至つて、「簡單なる新年状」の条が設けられ、漸く、今日最も多く用ゐられてゐる慣用表現が登場してくる。文例としては、「謹賀新年」と並んで「新年の御慶めでたく申納候」が掲げられてをり、丁度この時期は、明治以来普通に用ゐられてきた表現と、新興の表現とが交替しようとする過渡期であつたことを窺はせる。そして、その推移を推し進めた要因としては、明治四年（一八七一）に施行された郵便制度、及び明治三二年（一八九九）に一部指定郵便局で始められ明治三九年（一九〇六）に全国的に確立をみた年賀郵便の取扱ひとが支へになつたものと考へられる。すなはち、狭い葉書面に認める或いは印刷するのに適當な、簡潔しかも莊重さもある普遍的な表現が要求され、それに応へるものとして「賀正」や「謹賀新年」等の表現が一般性を得て定着して行つたものと思はれるからである。『書翰文講話及文範』の「謹賀新年」の条の上にある頭注欄に、「これは葉書に印刷する形式的年始状である：」と記してゐるのは、この語の進出の要因を、いみじくも解き明かしてゐるやうに思はれるのである。

(1) 「根南志具佐」後編一之卷。日本古典文学大系55『風来山人集』所収本文（一〇一頁）による。

(2) 明治書院 昭和四五年刊（三四頁）。

付記 本稿を成すに當つて、金沢直人教授（附属中学校長兼任）を始め附属

中学校の關係者には、調査に御協力下さつたことを感謝する。また金沢教授からは、書簡作法に関する貴重な資料を惠贈下さる等、御教示戴いた。茲に記して謝意を表する次第である。（昭和五二年一〇月）

## Formal Expressions of New Year Cards

Yutaka Tachibana

### Abstract

I. We use some formal words in new year cards. Which word do we use most frequently? To find the popularity of formal words of new year cards, I made following two investigations.

- (1) Which word is used most frequently of 205 new year cards which I received this year?
- (2) I inquired 240 people which word they used in their new year cards this year with enquête paper. The result of these investigations is that we use the expression of “Kinga-shinnen” most frequently.

II. How long have we used modern formal expression of new year cards? To find the earliest example of “Kinga-shinnen”, I researched:

- (1) Japanese dictionaries in Meiji period.
- (2) Letters and cards from 1833 to 1927.
- (3) Books of letter-writing since “Teikin-worai” (15 century).

And we have a result of following;

We can find the earliest example of “Kinga-shinnen” in the “Japanese-English Dictionary, 3rd ed., 1886” by J.C. Hepburn. Before then we had used “Shinnen no gyokei, medetaku môshi wosame sôrô.” etc.